

星への旅

吉村 昭



新潮文庫

はし たび
星 への 旅



定価はカバーに表
示してあります。

新潮文庫 草 117 B

昭和四十九年二月二十二日 発行
昭和五十三年三月十日 四刷

著 者 吉 村 昭

発 行 者 佐 藤 亮 一

発 行 所 株式 新 潮 社

郵便番号 一六二
東京都新宿区矢来町七一
電話 業務部(〇三)(二六六)五一二一
編集部(〇三)(二六六)五四二一
振替 東京四一八〇八番

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛ご送付
ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

印刷・東洋印刷株式会社 製本・憲専堂製本株式会社

© Akira Yoshimura 1974 Printed in Japan

星 へ の 旅

目次

鉄橋	………	七
少女架刑	………	三
透明標本	………	三二
石の微笑	………	一八七
星への旅	………	三三九
白い道	………	二八九

解説 磯田光一

星
へ
の
旅

鉄

橋

一

長い鉄橋のたもとの線路の近くで、焚火が赤々と焚かれていた。保線夫や警官が数人、顔を赤く染めながら火に手をかざしていた。漆黒の夜空には、冷え冷えと銀河が流れている。

近くの林から拾ってきた木はすっかり枯れているので、火はよく燃えた。男たちは、時々思い出したように林の中を手探りで枯木を拾ってきては、火の中に投げ込んだ。その度に、華麗な火の粉が金粉のように散って、周囲の枯草が明るく照らし出された。

その枯草の上に、膨らんだ荒蓆が置かれていた。すでに、検屍は済んでいた。

トレイニングシャツに縫い込まれた刺繍で、その死体の身元も大凡は見当がついていた。二人の警官が線路の土手を下り坂道を自動車で行ったのは、もう三十分ほど前である。事故死をした男の家族をその警官が連れて戻ってくるのを、男達は火に当りながら悠長に待っていた。ばそれではよかったのだ。

しかし、火を囲んでいる人々には、一抹の不安がないでもなかった。

死者の顔は勿論のこと、体もほとんど原形をとどめぬまでにこわされていた。ただ、両足だけは列車の車輪で不思議にもきちんと切られていたために片方は足首、片方は腿から、そのままの

形で残されていた。

「全くひどいこわされ方だね。俺ももう三十年も保線の仕事をやってきたけど、こんなにひどいのは今まで見たことがないよ」

小柄な痩せた最年長の男が、火に当りながら言った。

事故は、丁度日没時に起った。鉄橋の向い側の山の斜面に日が没しようとしていた僅かな間の出来事だった。

列車の機関士は、一際輝きを増した眩い西日を正面から受けて、人の姿を事前に認めることができなかったという。ただわずかに列車が鉄橋にかかる瞬間に、人の姿が西日を背に飛び上った姿だけを目にしたに過ぎなかった。

鉄

列車は、急ブレーキをかけた。が、その被害者の体は、陸続とつづいた多くの車輪で丹念に腿の付け根から頭部にかけてよじられ潰されていったのだ。

「しかし、ばらばらになった体を、よく手で持てるもんだな。俺たちには、とてもできない芸当だよ。怖くはないのかね」

まだ血の気の十分にもどらない顔をした若い保線夫が言った。

「馬鹿言うない。これだけは何度やっても薄気味悪いさ。今夜は飯も食えないよ。だけど、これだけきれいにこわされていると、肉でもつかむようなもので、思ったよりはいやじゃないよ。ひくひくしてまだ息があるのよりはましき。しかし、なにがいやと言って、子供を背負った女の飛び込みほどこいやなものはないね。少しでも生きていてみる、たまったものじゃないよ。虫の息で

も、女は必ず子供はどうしたってきくんだからな」

小柄な保線夫は、顔をしかめた。

警官たちは、炎の色を見下しながら黙って保線夫たちの会話を聞いていた。

事故が起きて席の中に死体を收容するまでの間、轢死者の処置は、ほとんどこの小柄な保線夫の手によって敏捷になされていた。車輪の間に巻き込まれていた胴体を車輻の下にもぐり込んで剥がすように取り出し、鉄橋の上を曳きずってきたのも、この保線夫であった。

駆けつけてきた警官たちは、さすがに気臆れして、一人も手を貸す勇氣のあるものはいなかったのだ。

「遅いね」

警官の一人が、同僚につぶやくように言った。

二人は、気まずそうに黙りこくったまま、線路と反対の方角に眼を向けた。

線路は山腹に沿って敷設されているので、東の方角に緩いスロープが広くひらけ、鉄橋の下を流れている広い川幅の水が白く光って曲折しているあたりには、町の灯が夜光虫のように密集している。ネオンの色も混っていた。

汽車の警笛が、微かにかすれてきこえてきた。

みると、山肌に沿って弧状に伸びている線路の端を、煙を赤くほっほっと染めた機関車が体を傾けながら進んでくる。

「七時二十七分の下りだな」

保線夫の一人が言った。

列車が、近づいて来た。

人々は、後へ退^{さが}った。機関車の車体が線路一杯にひろがり、機関室で石炭を投げ込む機関士のかがんだ姿が赤く染まって瞬^{またた}く間に過ぎた。

焚火の火が車体の通過する風にあおられ、枯草の上に火の粉が散った。

客車の明るい窓の列が、しばらくの間火に当たっている男達の顔を断続的に明るくした。一瞬間に目の前をかすめ過ぎて行く窓の中の乗客たちの姿は、ひどく満ち足りた和^{なご}んだものにみえた。このレールの上で先行した列車が一人の男を轢^ひいた直後だけに、その窓の中の平和な明るさは、奇妙な印象にみえた。

列車は鉄橋を轟^{ごうごう}々と鳴らし、やがて尾灯も小さくなって林のかげに消えて行った。

急に、あたりにより一層深い静寂がひろがった。

その時、微かに丘の下の方から、エンジンの音が呻^{うな}りながらきこえて来た。曲りくねった坂道を、樹の間^まがくれに、ヘッドライトが道の両側の樹木を明るくしながら登ってくる。

「来たようだな」

若い警官が、枯草の小路^{こみち}を道路の方へ下りてゆく。

自動車が、下の道に停った。ドアが開き、室内灯が灯^{とも}った。手に、白い布を巻いている若い男が二人いた。

警官に先導されて、黒い人影が、黙々と線路の方へ連なって登ってくる。

保線夫たちは、焚火に手をかざすのをやめた。

男たちは、線路の傍かたわらに立つと遠巻きに蓆をとり巻いた。やや遅れて、屈強な男に肩を支えられ
たセーターを着た女が上って来た。

「奥さん、気をしっかり持って下さい。御主人かどうかはつきり見定めて下さい」

警官の懐中電灯が、二方から蓆に集中された。

女の眼は、露出していた。蓆に近づくことが恐しいらしく、体をのけぞらして一歩も前へ進ま
なかつた。

「しっかりしなくちゃ駄目だ」

肩を支えている男が、女の体を前に押した。女は、必死にその力に抵抗しながらもその眼は蓆
に注がれていた。

男が女の肩をさらに押した時、女は、くるりと向きをかえると男の体にしがみついた。

「あの人です。あの靴は、うちの人のです」

女は、膝ひざをついた。

人々は、懐中電灯の光芒こうぼうの先端を見つめた。そこには、蓆の間から地面に垂直に立った白い運
動靴が見えた。

男が、女の体を抱かかえるように土手を降りて行った。

「間違いありませんでしょうか」

警官が、遠巻きに巻いている男たちに言った。

男たちは、しばらく黙っていたが、手に白い布を巻いている若い男が一步前へ出て見透すように蓆の方をうかがった。

「そのシューズは、たしかに北尾さんののに似ていますね」

警官は、近づくこと蓆を除いた。

「このジャケットは、あなた方のクラブのもですね、刺繡で富岡拳とみおかけんと書いてありますから……」

男たちは、無言でうなずいた。

「やはり、北尾さんでしょうね」

警官が、男たちを見廻した。

「そう、クラブの者で今見当らないのは、この北尾さんと小川だけで、小川は今夜大阪で試合をやっているはずですから……」

「そうですか、わかりました。それにジャケットにKという頭文字かしらもじがついているんです」

男たちは、顔を見合わせて無言でうなずいた。

「たしかにまちがいないです。北尾さんです」

男たちの中の一人が、言った。

死体を引取ることになった。

男たちは、警官たちと一緒にになって蓆の四隅よすみを持ち、下の路まで運んで白い警察のジープに載せた。

ジープと、男たちを載せてきた自家用車が、坂道で反転した。そして、ゆっくりと連なって坂

を蛇行して降りて行った。

三人の保線夫は線路ぎわに立って、ヘッドライトが路傍の樹々を明るく照らしながら降りて行くのを見下していた。

「行こうか」

年長の保線夫が言った。

かれらは焚火を散らし、黙々とつるはしで土をかぶせた。なにか三人とも、自分たちの果した役割がほとんど報いられないような空虚な不満を感じた。

保線夫たちは、火の消えるのを見届けてから、シグナルだけの灯った暗い線路の枕木の上を無言で遠ざかって行った。

川瀬の音だけが、鉄橋の下から蕭々ときこえていた。

星 へ の 旅

記者団が東京から車でやって来たのは、それから一時間ほどしてからであった。

北尾与一郎の死体は、ビニールの張られたふとんの上に合わせ絵のように置き並べられ、布団が掛けられていた。原形をとどめぬまでに潰された顔は、白布でおおわれていた。クラブの者たちと妻の光子は、ふとんの両脇に坐って代る代る線香をともしていた。

しかし、そうした空気も、押し寄せた報道陣の来訪によってたちまちかき乱されてしまった。フラッシュが閃き、会長の富岡和夫は勿論のこと、クラブの若い者たちまでが記者の質問攻めにあった。それは、全く無遠慮なもので、それまで保たれていた通夜の静寂は、いつか記者たちの

快活とも思える騒々しさに捲きこまれ賑やかな空気に変っていった。若い者たちの中には、不用意にも明るい声で記者の質問に答えるものもいた。

記者団の一致した見解は、こうであった。

つまり、北尾の死は、決して事故死ではない。自殺の疑いが、多分にある。

第一に、北尾ほど運動神経の発達した男が、列車に轢かれることなど到底あり得ないことだ。第二に、鉄橋の方角にある山路をロードワークの場所として、北尾が好んで出掛けていたとしても、線路の上を歩いたり駆けたりするということは、常識として考えられない。警察の調べ通り北尾の死に他殺の気配が全くないとすれば、自殺以外にないわけだという。

自殺の原因としてまず考えられることは、桑島一郎とのノンタイトルマッチだ。北尾は、フライ級世界第三位にランクされて、ほとんどチャンピオンとの挑戦交渉も成立していた。その手ならしにおこなったこの試合に、不覚にも若い桑島のパンチを受けて、リング生活をはじめて以来、初のダウンを喫して負けている。それで北尾は、自信を喪失し、神経も大分弱っていたのではあるまいか……。

警察でも大体そういう見解を固めているらしいが、なにか思い当る節はないかと、記者の質問は、執拗にこのことのみに集中された。

しかし、クラブの者たちの答は、記者たちを苛ら立たせた。——北尾は、桑島に負けた時も落胆していた様子はなく、むしろ奇妙にも明るい表情をしていたのだという。そして、その後も北尾は、ひどく自信に満ちた態度で、世界選手権を目指してそれまでよりも一層激しいトレーニング